

ソーシャルプレゼンスからみたコミュニケーション・プラットフォームの捉え直し

名古屋工業大学 学生員○早川 峻輔 名古屋工業大学 学生員 新目 真紀
名古屋工業大学 正会員 秀島 栄三 関西学院大学 正会員 松田 曜子
熊本大学 正会員 岡田 憲夫

1. はじめに

近年「新しい公共」あるいはそれに類する概念が、自治体をめぐって盛んに取り上げられるようになっている。新しい公共に寄与するボランティア活動やそのネットワーク作りについては、さまざまな研究がなされているが、情報社会の現今に適したコミュニケーション・プラットフォームを活用する上でそれに求められる要件についてはほとんど明らかになっていない。そこで本研究では、個人が他者や社会を理解するための社会的認知に焦点を当て、実践事例を対象にこの種のコミュニケーション・プラットフォーム上のあり方について考察する。

2. 研究の背景

市民参加型の活動では多くの場合、地域の志ある個人がその運営を担う。活動は属人的に展開され、運営の担い手の世代交代がうまくいかず、しばしば活動の継続が困難となることが指摘されている¹⁾。地域SNSに代表されるようなICTの活用が期待されるが、ICT環境を導入したからといってコミュニティ内のコミュニケーションの質が改善され促進されるわけではない。大阪・豊中を拠点とする翻訳家コミュニティとともに東日本大震災発生後の被災地の状況及び復旧プロセスを英語で伝える活動が行われている。この活動のためのコミュニケーション・プラットフォームとして、メーリングリスト(ML)とe-learningに向けて開発された簡易Web構築ソフトウェアmoodleが利用され、定例会も開かれている。

3. 研究の目的

上述の活動では、Voices from the Field (略称 VF)と命名された Web サイトを立ち上げ、防災の専門家達が、日本語で記した被災地での諸活動を、英語に翻訳して発信している。信頼性の高いメッセージを作成するために、翻訳家コミュニティを中心に防災の専門家、サイト管理者ら参加者の協働によるコミ

ュニケーションの質の改善が重要になる。そこで参加者をつなぐコミュニケーション・プラットフォームを用意した(図-1)。コミュニティの核となる翻訳家コミュニティは、1985年に設立されたNPOであり、コミュニティ独自の情報共有方法と信頼関係が築かれていた。新たな協働を実現するためには、異なる役割を持つ参加者の他者依存的な関係とそこから生じる一元的なコミュニケーションを乗り越える必要がある。社会心理学では社会的認知を支援するものとしてソーシャルプレゼンス醸成の有効性が示唆されている²⁾。ソーシャルプレゼンスとは、受け取る側が認識する伝える側との心理的な距離であり、他者の言語的表現と非言語的表現から判断される。本研究では、MLとWeb上のコミュニケーションをソーシャルプレゼンスという観点から捉え直し、コミュニケーション・プラットフォームを活用する上でそれに求められる要件を明らかにする。

4. 研究の方法

本研究では、1年間の活動をコミュニケーション・プラットフォームがセットアップされた段階、新しいWebサイトが開設された段階、特定のディメンジョンに向けた意見交換がされるようになった段階に分けて考察を行う。表-1は各段階で実施した活動の概要である。各段階の活動をソーシャルプレゼンスの醸成と捉え、MLとWeb上のコミュニケーションの変容を分析する。



図-1 コミュニケーション・プラットフォーム概要

表-1 活動プロセス

日付		Activity 概要
第1段階	4月18日	VfFの活動を実行することを決める
	5月7日	検討会@豊中：大枠の決定，ML作成
	6月3日	ウェブサイト（暫定版）開設，海外の登録モニタ（Registered Monitor）募集開始
	6月18日	検討会@豊中：サイト改良，操作確認等
第2段階	6月27日	ウェブサイト（正式版）開設
	7月23日	検討会@豊中：twitter，Facebookの活用
	8月27日	検討会@豊中：日本語サイトの準備
第3段階	10月1日	検討会@豊中：翻訳理解の促進
	11月26日	検討会@豊中：Registered Monitorからのメッセージの翻訳方法の検討
	1月28日	検討会@豊中：翻訳理解の促進
	3月18日	検討会@豊中：翻訳理解の促進

5. 分析の結果

第1段階でのコミュニケーションでは，Webサイトに掲載する文章の体裁に関するものが多く見受けられた．例えばキャプションとして全体のメッセージを要約するような文章を入れること，記事の提供元を記すこと，わかりにくい用語については，文末に注釈をつけるといったことがルールとして決まっていた．この段階では，翻訳メンバと Registered Monitor との直接的なコミュニケーションはなく，防災に関する専門家がやりとりを行っていた．

第2段階では翻訳する日本語の文章の解釈に関するやり取りが中心となっていた．例えば「女の子がよかったなー（笑）今なみーんな仕事ない．プー太郎（笑）食べ物 はもう余ってんだよ．でも，たくさん持ってくるもんだから．セブン弁当のほうがいい．」という文章を翻訳する際に，次のような質問が挙がった．被災地で食べ物が不足していると考えていたのに何故，「食べ物はもう余っている」のか？何故「セブン弁当」のほうがいいのか？第2段階の翻訳では被災地で支援にあたっている専門家との協働が確認された．Registered Monitor との関係にも変

容が見られ，翻訳メンバから Registered Monitor のメッセージを日本語に翻訳して Web サイトに公開したいという提案が起きる．

第3段階になると，翻訳メンバの間では，被災地で起きている状況を積極的に理解しようとするためのやり取りが多く見られる．例えば記事の中で「しあわせ，運べるように」という曲が紹介されていた．この曲は，阪神・淡路大震災（1995年）の後，震災の被災地・神戸で生まれた曲である．この曲を聴いたことがない翻訳メンバは，自主的にこの曲について調査し既に英語歌詞があること，2011年11月13日に NHK 総合テレビで放映されることを報告している．Registered Monitor との関係にも更なる変容が見られた．この段階では翻訳メンバ2名が被災地を訪問しているが，訪問の際に Registered Monitor からコメントを被災者に伝えるとともに，その結果を Registered Monitor に伝えるといったやりとりが見られた．

6. おわりに

本研究では，コミュニケーション・プラットフォーム上でのコミュニケーションをソーシャルプレゼンスという観点から分析した．分析の結果，ソーシャルプレゼンスの醸成がコミュニケーションの質の変容に寄与している可能性が示唆された．本研究ではソーシャルプレゼンスを定量的に測定するところまでは至っていないが，本稿で試みたようなソーシャルプレゼンスの実践に基づく分析は手薄な状況であることから本稿での試みは有意義と言える．

謝辞：本研究は京都大学防災研究所共同研究（23U-04，24G-14）の一環として行った．記して謝意を表する．

参考文献

- 1) 秀島栄三：被災地域の取り組みの状況を海外に正確に伝えるウェブサイトの運用と効果検証，京都大学防災研究所特別緊急共同研究 23U-04 成果報告書，2012．
- 2) Akyol, Z., & Garrison, D. R. (2008). The development of a community of inquiry over time in an online course: Understanding the progression and integration of social, cognitive and teaching presence. *Journal of Asynchronous Learning Networks (JALN)*, 12(3).